

世界遺産

石見銀山遺跡 とその文化的景観

World Heritage Site
Iwami Ginzan Silver Mine and its Cultural Landscape



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

國際連合教育科學
文化機關(ユネスコ)



Iwami Ginzan Silver Mine and
its Cultural Landscape
Inscribed on the World Heritage List in 2007

石見銀山遺跡とその文化的景観
2007年世界遺産一覧表記載

石見銀山遺跡とその文化的景観

世界遺産登録

世界遺産とは、ユネスコ総会で採択された世界遺産条約に基づき「世界遺産リスト」に記載されている「顕著な普遍的価値」(国家間の境界を超え、人類全体にとって現代及び将来世代に共通した重要性をもつような、傑出した文化的な意義または自然的な価値)を有する自然や生態系保存地域、記念物、遺跡などのことです。

石見銀山遺跡は、環境に配慮し、自然と共生した鉱山運営を行っていたことが特に評価され、2007年7月に「石見銀山遺跡とその文化的景観」として、国内では14件目、鉱山遺跡としてはアジアで初めての世界遺産に登録されました。



世界遺産認定書

世界に知られた石見銀山

石見銀山は、1527年※1に九州博多の商人神屋寿禎により発見されて以来、1923年の休山まで約400年にわたって採掘されてきた日本を代表する鉱山遺跡です。

大航海時代の16世紀、石見銀山は日本の銀鉱山としてヨーロッパ人に唯一知られた存在でした。当時ヨーロッパで製作されたアジアや日本の地図に、石見銀山付近を指して「銀鉱山王国」「銀王国」と記されています。

また、スペインに残る16世紀に記録された史料には、「イワニ国 銀が大量にある。当地にはポルトガル人が来航する」とも記されています。※2

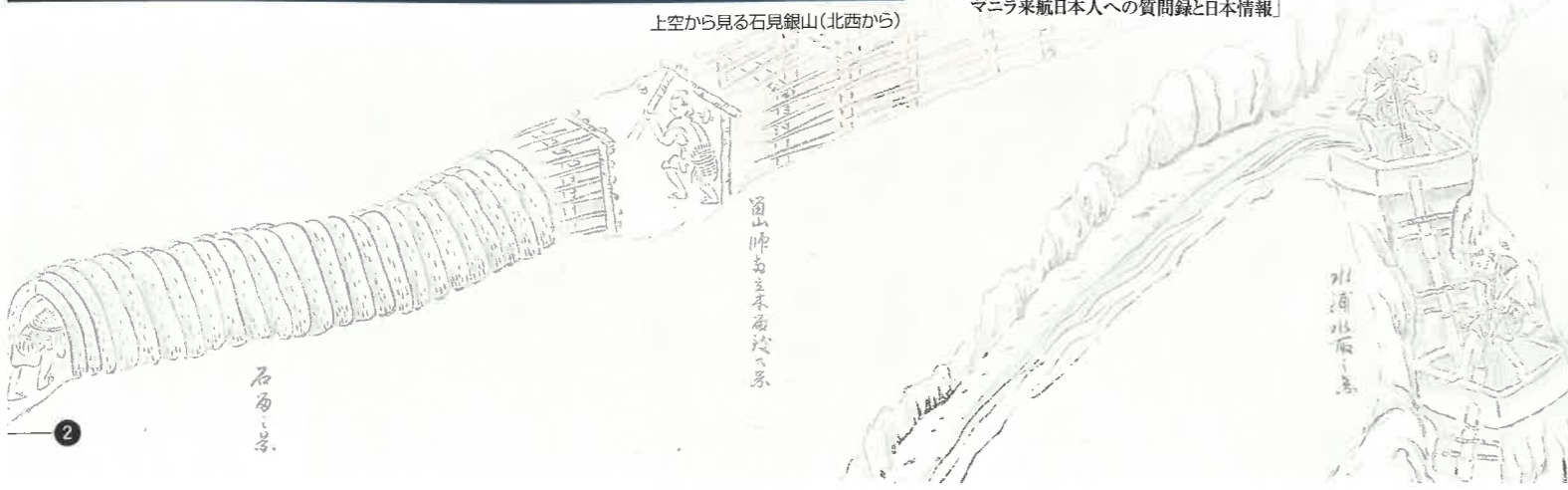
石見銀山が銀を基軸にした東アジア交易において重要役割を果たしていたことは明らかで、今も遺跡として当時のままに残されています。

※1 これまで、神屋寿禎が石見銀山を発見した年は1526年としていましたが、その後の調査研究成果により、この冊子では1527年と改めています。

※2 出展: Archivo Historico Nacional (国立歴史古文書館/スペイン・マドリッド)所蔵「フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール(ドミニコ会士)のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」



上空から見る石見銀山(北西から)



石見銀山

石見銀山

石見銀山

石見銀山遺跡の世界遺産としての価値

1 世界的に重要な経済・文化交流を生み出した

16世紀、石見銀山では、東アジアの伝統的な精錬技術である灰吹法*を取り入れることによって銀の現地生産を軌道に乗せ、良質な銀を大量に生産しました。石見銀山で用いられた技術や生産方式は、この後国内の多くの鉱山に伝わり、日本史上まれな銀生産の隆盛をもたらしました。こうして日本で生産された大量の銀は、貿易を通じて16世紀から17世紀の東アジアへ流通しました。また、この頃金銀や香辛料を求めて自らの文明圏を越えて世界に活動範囲を拡げつつあったヨーロッパ人が東アジアの貿易に参入し、東西の異なる経済・文化交流が行われるようになりました。*灰吹法…13ページ参照

丁銀3点(左から文禄石州丁銀、御取納丁銀、御公用丁銀)



ティセラ/日本図(1595年)「Hivami」(石見)付近に「Argenti fodinae」(銀鉱山)の記載あり

オルテリウス/タルタリア(鞍鞆)図(1570年)日本に「Minas de plata」(銀鉱山)の記載あり

2 伝統的技術による銀生産方式を豊富で良好に残す

戦国時代の石見銀山では、採掘から精錬までの作業が、すべて人力・手作業で行われました。このような作業を行う製錬工房が銀山現地に多数集まることによって、高品質の銀を大量に生産することができました。このことを証明する900カ所以上の露頭掘り跡や坑道跡が今でも銀山山中に残っており、また、これらに隣接して、かつての製錬工房や生活の場が1,000カ所以上も残っています。

江戸時代の石見銀山では従来の伝統的技術による銀生産が続けられました。しかし、明治維新を迎えた19世紀後半以後になって、ヨーロッパの産業革命で発展を遂げた新技術が導入されましたが、銀鉱石が枯渇したため鉱山活動が停止していきました。その結果、今日、石見銀山遺跡には鉱山開発の伝統的技術による銀生産の跡が良好に残されました。



露頭掘り跡

ひな壇状に続く工房・集落跡

3 銀の生産から搬出に至る全体像を不足なく明確に示す

石見銀山遺跡には、採掘から精錬まで行われた鉱山跡を中心に、これを外敵から守った城跡が周囲の山々にあり、銀鉱石や銀、銀山で必要とされた物資を輸送した二本の街道が銀山から港までつながっています。さらに、かつて銀山の操業によって栄えた鉱山町や港町は、今日でも地域住民の生活の場となっています。このように、石見銀山遺跡は、銀の生産から搬出に至る鉱山運営の全体像を不足なく明確に示しています。

また、石見銀山遺跡とその周辺では、かつて製錬に必要とされた膨大な木材燃料の供給が、森林資源の適切な管理の下に行われたことにより、今日でも豊かな山林を残しています。このように鉱山に関する遺跡と豊かな自然環境が一体となって文化的景観*を形成する例は、世界的に極めて貴重です。

*文化的景観…人間が自然と共生する中で育んできた景観地



山吹城跡

瀬ヶ浦港と集落

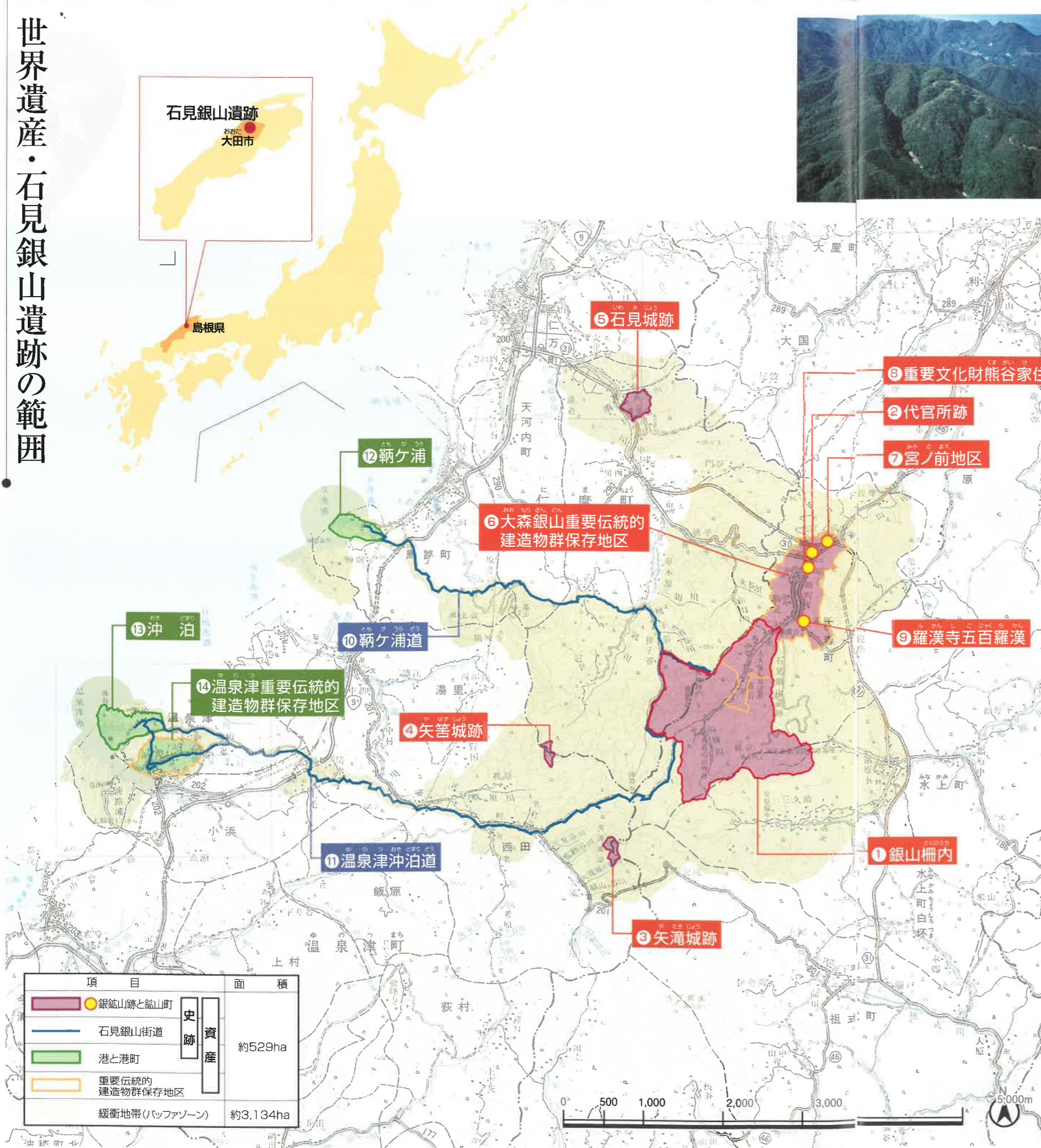
石見銀山街と瀬ヶ浦道

温泉津の町並み

石見銀山街と瀬ヶ浦道

石見銀山

世界遺産・石見銀山遺跡の範囲



左/銀山柵内(上空から見た仙ノ山)
右/海から見た石見銀山(西から)

銀山跡と鉱山町

16世紀前半から20世紀前半にかけて操業された銀山跡の諸様相を良好に残す鉱山本体と、それに伴って発達した鉱山町および支配関連の山城跡。

① 銀山柵内	16世紀前半から本格的に開発され、20世紀前半まで操業された銀山跡の本体。江戸時代初め、柵で厳重に囲まれていたことからこの名がある。銀の生産活動はもちろんのこと、生活・流通・信仰・支配に関わる遺構・遺物が良好に残る。
② 代官所跡	17世紀に銀山柵内から大森地区に移転した石見銀山支配の中枢施設跡。1815年に再建された表門・門長屋が残る。
③ 矢瀧城跡	石見銀山を防御するための山城跡の一つで、温泉津沖泊道が近くを通る。中世山城の立地・形態をよく留める。
④ 矢筈城跡	石見銀山を防御するための山城跡の一つで、温泉津沖泊道を挟んで矢瀧城と対峙する。中世山城の立地・形態をよく留める。
⑤ 石見城跡	石見銀山を防御するための山城跡の一つで、仁摩方面に出る街道沿いを守備する。中世山城の立地・形態をよく留める。
⑥ 大森銀山重要伝統的建造物群保存地区	鉱山に隣接して発展した、江戸時代幕府直轄地の石見銀山附御料150余村の中心町。武家・商家の旧宅や、社寺などが混在してよく残る。昭和62年の国選定。
⑦ 宮ノ前地区	大森地区の代官所跡近くで発見された、16世紀末～17世紀初頭の銀製錬工房跡。
⑧ 重要文化財熊谷家住宅	大森地区における最大規模の商家建築。有力商人の地位や生活の変遷を最もよく示している。
⑨ 羅漢寺五百羅漢	岩盤に3つの石窟を穿ち、石造の三尊仏と羅漢坐像500体を安置する。18世紀中頃の制作で、石見銀山の石造物文化を代表する信仰遺跡。

街道(石見銀山街道)

石見銀山から二つの港湾に向けてつながる、銀・銀鉱石と諸物資の輸送路。

⑩ 轆ヶ浦道	轆ヶ浦が銀・銀鉱石の積出港として機能していたときに利用された全長約7kmの街道。
⑪ 温泉津沖泊道	石見銀山の外港であった温泉津・沖泊と柵内を結ぶ全長12kmの街道。17世紀初頭に尾道道が開発された以降も銀山と港を繋ぐ幹線路であった。

港と港町

石見銀山で産出した銀・銀鉱石の積み出しに利用された二つの港湾と、これに隣接して発達した港町および港湾集落。

⑫ 轆ヶ浦	16世紀前半から中頃にかけて銀・銀鉱石を博多に積み出した港。船の係留用に自然の岩盤をくり抜いた鼻ぐり岩などが中世港湾を彷彿とさせる。繁栄した頃の土地利用を引き継ぐ集落景観も貴重である。
⑬ 沖泊	主に16世紀後半の約40年間、銀の輸送や、石見銀山への物資補給、軍事基地として機能した港。二つの城跡や鼻ぐり岩などが往時を偲ばせる。温泉津と一体となって歴史を重ねた場所であり、集落は往時の土地利用を今に引き継いでいる。
⑭ 温泉津重要伝統的建造物群保存地区	石見銀山の外港として発展した温泉のある港町。江戸時代以来の町割りをよく残し、町屋、廻船問屋、温泉旅館、社寺等の伝統的建造物がよく残る。平成16年、温泉町としては日本で唯一の国選定を受けた。

〈大森地区〉

大森地区の町並みは江戸時代、二代目奉行竹村丹後守が陣屋を大森に移転してから形成されている。代官所の周りの役所や郷宿(公用で代官所に来た人が泊る宿)がおかれ、さらに武家の屋敷や商家が混在して歴史的文化的景観を形成している。



勝源寺(公開施設)

江戸幕府の二代目奉行の竹村丹後守が大森に建てた寺。竹村奉行をはじめとする奉行代官の墓所があるほか、「家康並びに十六将像」など貴重な資料が展示されている。また、裏山には徳川家康を祀る東照宮がある。



重要文化財熊谷家住宅(公開施設)

大森銀山地区最大の商家建築。熊谷家は金融業などを営みながら、町役人や代官所の御用商人を務め、19世紀には大森の中でも最も有力な商家として栄えた。建物は、大規模な保存修理工事により、幕末から明治初年の姿に復元された。



旧河島家(公開施設)

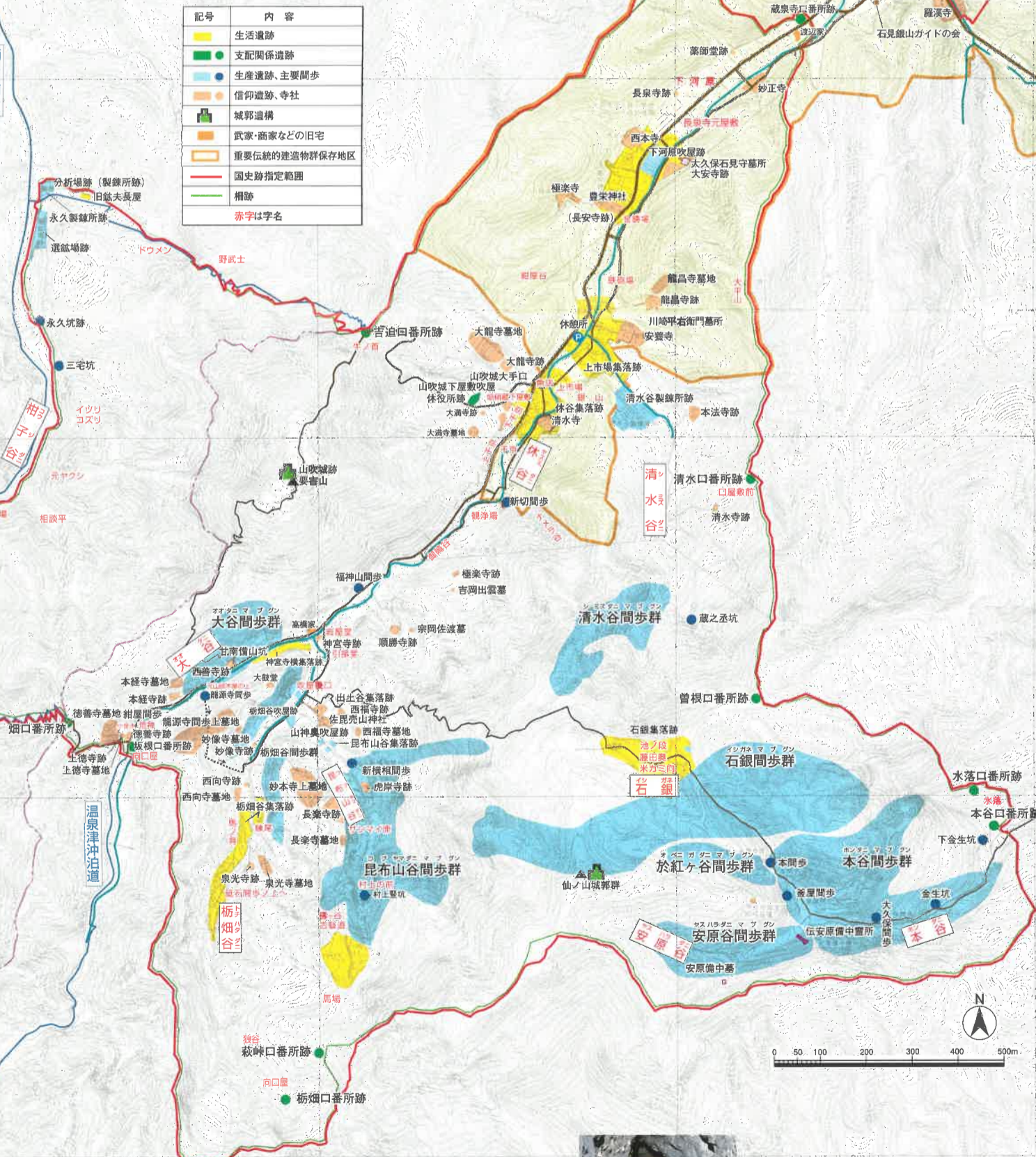
寛政の大火後、1800年代初頭に建築された代官所地役人遺宅。唯一公開されている武家屋敷で、建物内部には当時の調度品が展示されている。



代官所跡(石見銀山資料館)(公開施設)

江戸幕府が現地に置いた支配拠点施設の跡。現在は、石見銀山資料館として利用され、石見銀山の調査研究、資料の保存管理・公開展示、ガイダンス機能の一翼を担っている。1800年の大火後に再建された瓦葺き平屋建ての表門とその左右に門長屋が現存している。

記号	内容
■	生活遺跡
■	支配関係遺跡
■	生産遺跡、主要間歩
■	信仰遺跡、寺社
■	城郭遺構
■	武家・商家などの旧宅
■	重要伝統的建造物群保存地区
■	国史跡指定範囲
■	橋跡
●	赤字は字名



〈銀山地区〉

銀山地区は戦国時代、仙ノ山を中心に集落が形成され、鉱山開発とともに銀山川付近まで広がっていった。江戸時代になると山内(銀採掘に関わる人びとの集落)となり、柵で囲まれ、出入り口には番所がおかれた。今では家並みはまばらになったが、寺社や谷筋に残っている石垣から往時のにぎわいが想像できる。



元和年間(1617~1619)石見国絵図(浜田市教育委員会所蔵)



清水谷製錬所跡

明治28年(1895)、藤田組によって建設された大型の製錬所跡。周囲には鉱夫住宅跡・変電所跡・選鉱場跡・トロッコ道などがのこる。

石銀集落跡

仙ノ山頂の北東に位置する地区である。発掘調査では、道路に面して建物が連続して並んでいたことが明らかにされ、銀製錬炉や坑道跡なども確認された。豊かな出土品などから山頂に形成された鉱山町の遺跡と考えられる。

本谷地区

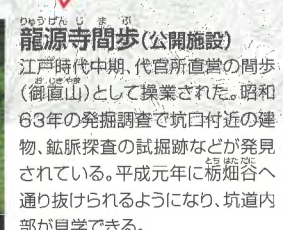
銀鉱石の採掘跡が集中する地区である。最大の坑道である大久保間歩、徳川家康に献上した銀を産出した釜屋間歩などがある。発掘された釜屋間歩付近では、岩盤を加工した作業場や坑道、また作業場へ登るための階段などが発見された。大久保間歩は限定ツアーで公開している。



本谷製錬所跡(公開施設)



龍源寺間歩(公開施設)



釜屋間歩付近(岩盤加工遺構)



大久保間歩(公開施設)



本谷製錬所跡(公開施設)

主な遺跡紹介 (大森銀山地区)

城上神社

P6 C-1

大森の氏神であり、大森大明神とも呼ばれる。拜殿の天井には龍が描かれており、その下で拍手を打つと音が反響することから「鳴き龍」と呼ばれている。



岡家

P6 C-1

代官所地役人(鉱山経営や技術などの専門的知識を持った地元採用の役人)の遺宅。ここは鹿野、沢井氏の住まいであった。(非公開)



青山家

P6 C-1

江戸時代に石見銀山の領内の村々と代官所の間を公的に取り持つ「郷宿」田儀屋遺宅。漆喰塗込めの外壁で大森では唯一の妻入り形式の店構えである。(非公開)



井戸神社

P6 C-1

江戸中期にこの地方にさつま芋をもたらすなど、飢饉を救った代官として広く敬われている井戸平左衛門を祀っている。



柳原家

P6 C-2

代官所地役人の遺宅。質素な中にも武家住宅の体裁が間取りや玄関に示されている。(非公開)



三宅家

P6 C-2

代官所地役人の田邊家遺宅。初代田邊彦右衛門は江戸幕府の初代奉行大久保長安によって甲斐国から召し抱えられた。門扉、露地門を備えた武家の住宅である。(非公開)



阿部家

P6 C-2

代官所地役人の遺宅で初代阿部清兵衛は大久保長安によって甲斐国から召し抱えられた。門長屋もあり、塀を巡らすなど大森では最大級の武家住宅である。(非公開)



栄泉寺

P6 C-2

井戸平左衛門がこの寺でさつま芋のことを旅の僧から聞いたといわれる。慶長元年(1596)創建、文化4年(1807)に再建したと伝える。



金森家

P6 C-2

郷宿泉屋(旧川北家)の遺宅で、嘉永3年(1850)に建てられたことが棟札により明らかとなった。2階に茶室をもつなど商家としては熊谷家に次ぐ規模の建物である。1階土間には酒造の跡も見られている。(非公開)



永久製錬所跡

P6 A-3

明治20年(1887)、石見銀山は大森の藤田組に権利が譲渡されて大森銀山となり、柑子谷(仁摩町大國)の永久製錬所が開発の中心となった。同35年には発電所を建設、電動式ポンプによる揚水で再び活況を呈した。



豊栄神社

P6 B-3

戦国大名・毛利元就を祭神とする神社。慶応2年(1866)、大森に進駐した長州軍が元就の木像が祀られていた寺院の境内を整備。翌年に本殿・拜殿を建立。



清水寺

P7 B-3

初め天池寺といひ仙ノ山の石銀にあった。平安時代に名を清水寺と改め、幕末に清水谷地区に移転し、明治11年(1878)に現在地に移る。徳川家康が山師安原備中に与えた「辻が花染丁子文道服」(重要文化財)など多数の文化財を伝えている。



新切間歩

P7 B-4

正徳3年(1713)、最初は水抜き坑として掘られた御直山(代官所直営の間歩)の一つ。



山吹城跡(要害山)

P7 A-4

銀山守備のための山城として戦国時代には攻防戦が展開された。頂上付近の主郭を中心に空堀、竪堀などが設けられている。



福神山間歩

P7 B-4

江戸時代中期の一時期、御直山として操業されたが、その前後は自分山(個人所有の坑道)だった。銀山川の下を通過して仙ノ山へ掘り進んでいる。



高橋家

P7 A-4

銀山町年寄山組頭の遺宅で茶室を設け、付属建物では酒造なども行なっていたという銀山町屈指の建築。「山組頭」は鉱山の取締役で鉱夫の人事や物資の購入などを担当していた。(非公開)



佐毘売山神社

P7 B-4

15世紀中頃創建の鉱山の守り神、精錬の神「金山彦命」を祭る神社。壮大で全国一の規模の山神社で、現建物は文政2年(1819)再建。



新横相間歩

P7 B-4

江戸時代中期以後の御直山のついで整然と掘られている。幕末に約50人が坑内で働いていたといわれる。



本間歩

P7 C-5

開鑿時期ははっきりしないが主要な間歩「本間歩」の名前が付いたものである。



石見銀山遺跡の概要

銀鉱山跡の周辺には銀の積み出しや物資輸送のために使われた綱ヶ浦、沖泊などの港や集落、また、温泉町としては日本で唯一の重要伝統的建造物群保存地区に選定された温泉津の町並みなどがある。これらと石見銀山とは街道(綱ヶ浦道、温泉津沖泊道)で結ばれていた。また、銀山争奪に関わった山城跡なども存在している。

石見銀山街道



石見銀山街道(温泉津沖泊道)

温泉津沖泊が石見銀山支配の拠点とされ、その外港となった16世紀後半、銀の搬出と諸物資の搬入のために利用された道。全長12kmほどの距離があり、銀山の坂根口を出入り口とし、そこから急な勾配の降路坂付近を越え、西田、清水、松山を通り、途中二手に分かれて温泉津と沖泊に至る。石畳や土橋がよく残り、道標・石仏などがあるほか、西田の火伏観音、清水の金柄杓の井戸がある。



松山の道標
温泉津沖泊道のうち石段がよくのこる地点で、石列によってつくられた側溝もよくのこっている。周囲には石切場跡や土橋もみられ往時の様子を偲ぶことができる。松山の道標には「右 銀山大森五〇一いづも大や〇〇」の文字が刻まれている。

記号	内容
	銀山街道(街道指定)
	銀山街道(指定外)
	銀山街道(指定地内等)
	街道関連遺跡
	史跡指定地
	重要伝統的建造物群保存地区



清水の金柄杓
清水集落には、岩と民家の石垣に囲まれ清水が湧き出る泉がある。そこは、水神を祀る小祠や湧き出した岩、石垣が相まって神聖性と清涼感を感じさせる空間である。大森代官が清水のおいしさに感心し金柄杓を奉納し、この呼び名になったという。



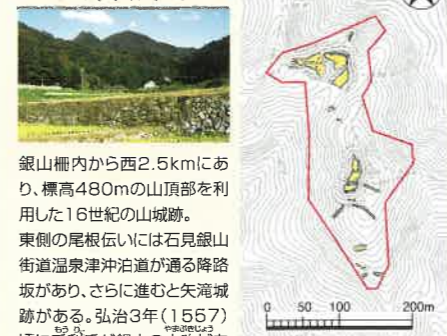
西田の農村景観
街道沿いの宿場町として発展した西田集落の周辺には、棚田に代表される農村景観がよくのこり、秋になるとこの地方独特の「ヨスクハデ」がつけられる。ヨスクとはフクロウの方言である。

矢滝城跡



銀山柵内から南西2.5kmにあり、標高634mの山頂部を利用した16世紀の山城跡。北側には石見銀山街道温泉津沖泊道が通る降路坂があり、さらに進むと矢滝城跡があり、石見銀山を防衛するための要衝を押さえる。享禄元年(1528)には戦国大名大内氏が拠点とし、3年後の享禄4年(1531)には南隣の領主小笠原氏がこれを奪い銀山を支配したとの記録がある。

矢筈城跡



銀山柵内から西2.5kmにあり、標高480mの山頂部を利用した16世紀の山城跡。東側の尾根伝いには石見銀山街道温泉津沖泊道が通る降路坂があり、さらに進むと矢滝城跡がある。弘治3年(1557)頃に毛利氏が銀山の山城を推して尼子氏を攻撃し、この城をはじめ周囲3カ所の城から撤退させたとみられる記録がある。

石見城跡



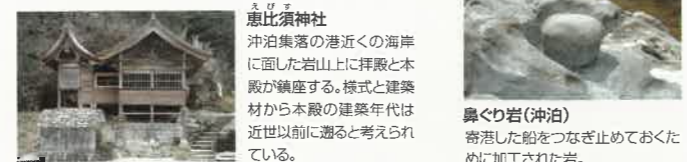
銀山柵内から北西5kmにあり、標高153mの岩山山頂部を利用した16世紀の山城跡。日本海に近い平地部の南端にあって、仁摩方面を守衛するための重要拠点だった。永禄8年(1565)頃に温泉津や石見銀山の権益を持った近隣地域の領主温泉氏が軍事的拠点としていたとみられる。

記号	内容
	史跡指定地
	平垣地などの遺構

港と港町



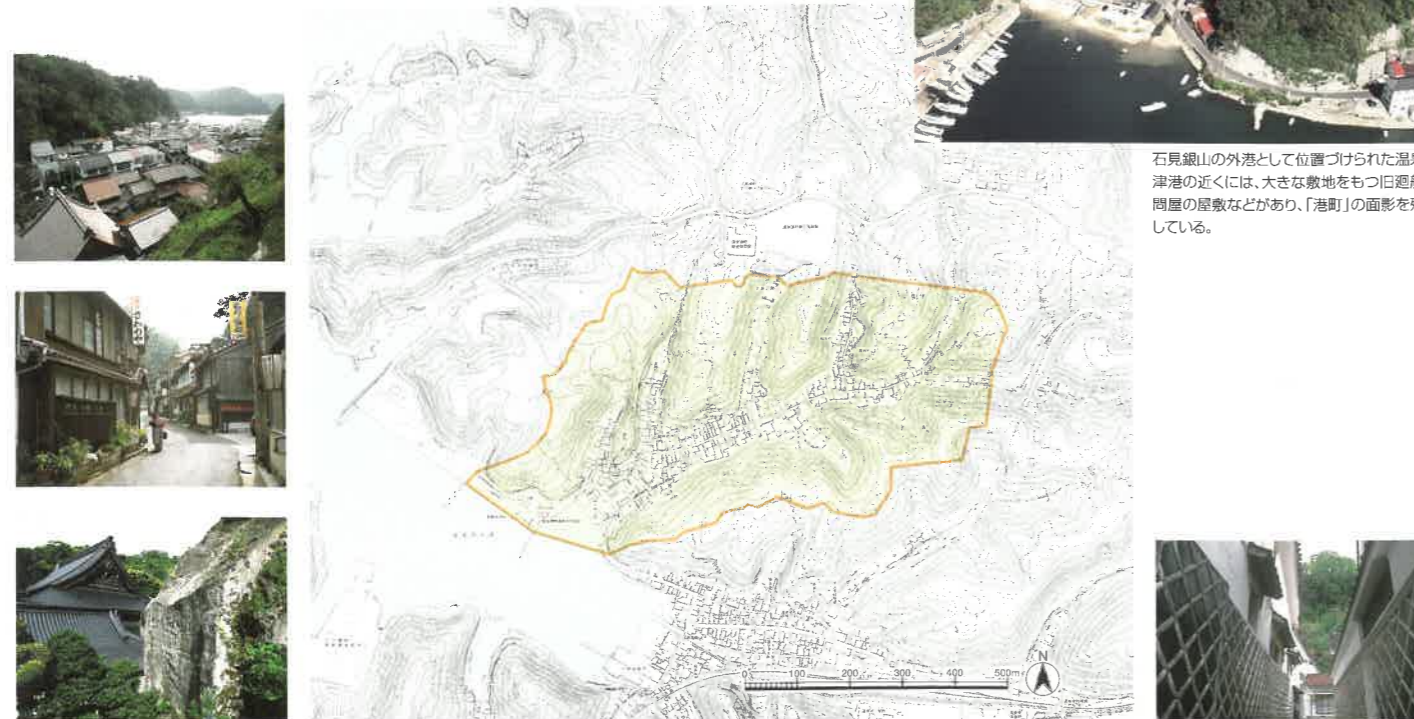
沖泊
 銀山柵内から西方8.8kmの日本海沿岸にあり、石見銀山を毛利氏が支配した16世紀後半、銀の積み出しと石見銀山への物資補給が行われた港。港の両岸には船の係留施設「鼻ぐり岩」があり、先端の両丘陵には軍事上の必要から築かれた山城跡がある。湾に続いて浜があり、奥の谷部に16世紀まで遡る方形地割りの集落がある。銀山にゆかりのある航海安全の神社、船舶用に供された井戸、集落の火除け神である小祠が残る。



轡ヶ浦
 銀山柵内から北西6kmの日本海沿岸にあり、石見銀山開発初期の16世紀前半、銀・銀鉱石を九州の博多に積み出した港。銀山開発もないころ、博多から銀鉱石を求めて多くの商船が来航し、繁栄したとの記録がある。江戸初期には漁村化し、その後大規模な開発もなく、中世港湾の形態を残すこととなった。湾の両岸の船の係留施設「鼻ぐり岩」、海上交通の安全を祈った神社、方形区画の地割りを引き継ぐ谷部の集落、銀鉱石貯蔵や支配管理施設の伝承地、船舶用に供された井戸などが残っている。

温泉津地区重要伝統的建造物群保存地区

日本海に面したリアス式海灣入り部にあり、沖泊と隣り合わせの港町。16世紀後半に石見銀山とその周辺地域の支配の中心地となって活況を呈した。また、古くからの温泉のある町であり、戦国大名や銀山の代官、文人墨客などが逗留した。全長800mほどの町並みで、港から東へ向かう谷筋の通りと枝分かれする4本の枝筋に沿って、家屋が建ち並ぶ。江戸時代前期の配置状況と変わらず、間口の狭い短冊状地割りを引き継いでいる。特に狭い谷部の土地利用は、かつての石見銀山と関わりながら発展した町の様子をよく伝えている。



調査・研究進む石見銀山遺跡

石見銀山遺跡では、その全容と価値を明らかにするため、平成8年度から島根県と大田市が共同し、各分野にわたる次のような総合的調査を実施しています。

発掘調査

採鉱と製錬の技術体系の解明を柱に、およそ400年に及ぶ鉱山遺跡の実態を明らかにする調査で、総合調査の中心的な位置を占めます。また、近年では遺跡の整備活用を前提とした調査としても行っています。発掘調査によって、地下に埋もれていた鉱山の生産生活・消費流通・支配信仰などに関わる多様な遺構・遺物が確認されています。



出土遺物(石見藤田地区)

石造物調査

石見銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みなどを、墓石を中心とする石造物から明らかにしようとする調査です。遺跡をくまなく歩いて概数を調べる分布調査、宗派・立地・残り具合などから特徴的な墓石を調べる詳細調査などを行っています。



石銀地区調査

大久保長安墓所

下張り文書調査の様子



鉄の輸送に関する史料



文献調査

古文書をはじめとする文献史料を手がかりに石見銀山とその周辺地域の歴史を明らかにする調査です。県内外の広い範囲にわたる史料調査を実施しています。特に石見銀山などに関係する古文書の整理・調査(収集保存の支援、目録作成や写真撮影)を行い、その成果を報告書や論文集として公表しています。調査研究の成果例としては、石見銀山の発見年について、古くからの通説を訂正する新説(大永7年)が発表され、現在では有力な説になっています。

襖の裏から古文書発見!

昔の家に使われていた襖などには、補強材(下張り)として古文書を転用することがありました。最近の調査でもいくつかの家の下張り文書を確認していますが、その中には江戸時代の代官所役人が書いた日記や約400年前の年貢鉄の輸送に関する手形といった貴重な文書が残されていました。今後下張り文書のみならず総合的な調査を継続していきます。

テーマ別調査研究

世界遺産登録後は基礎的調査研究に加えテーマ毎に短期間で集中的な共同研究を行うテーマ別調査研究を行っています。この研究では、「石見銀山の歴史」を解明するために、考古学・文献学・歴史地理学・地質学・鉱山学・植物学といった各分野から石見銀山を復元的に明らかにすることを目的としています。また、世界遺産登録時の付帯事項として世界遺産委員会から鉱山比較を要請されたことから「東アジア鉱山比較」を実施し、東アジア地域を中心に鉱山遺跡の情報を収集するとともに、石見銀山から技術移転された国内鉱山遺跡の研究を行っています。

科学調査

発掘調査などで得られた資料を科学的方法を用いて分析し、石見銀山における採掘から精錬にいたる技術の解明を目的とする調査です。遺物に即した灰吹法技術の証明や、製錬工程のフローチャート作り、また、遺構・遺物の保存展示方法を検討するための三次元計測や薬剤処理・遺構の剥ぎ取り保存などを実施しています。



出土谷地区炉跡剥ぎ取り



出土遺物保存処理

生物環境調査

石見銀山遺跡では、世界遺産に登録されてから観光客の急増などで自然環境に悪影響が出ていないかを調べるために生物環境調査も実施しています。現在までのところ生物環境の変化は見られませんが、冬眠中のモジロコウモリを調査しています。このうち、大久保間歩ではコウモリの冬眠調査を行っています。キクガシラコウモリ、モジロコウモリ、ユビナガコウモリ、テングコウモリの4種類が冬眠していますが、彼らの生活は未だに謎だらけ。今後も環境を守りながら調査を続けていきます。



冬眠中のモジロコウモリ

ここがすごい石見銀山 —日本最古の犬釘発見—

大久保間歩で新しい発見がありました。明治時代に使用されたトロッコのレールを枕木に留めるための釘が見つかったのです。釘の頭の形が犬の頭に似ていることからドッグスパイクと呼ばれています。現地にそのまま残されている例としては国内唯一で最古のものであることから、産業考古学会より2019年度の推薦産業遺産に認定され、石見銀山の学術的価値を高める発見の一つとなりました。



犬釘

銀の採掘から精錬までの技術

石見銀山遺跡が世界遺産として評価されている理由の一つに、16世紀からすでに環境に配慮し、自然と共生した鉱山運営を行っていたことがあげられます。石見銀山

石見銀山鉱山図解(中村俊郎氏所蔵)



銀を掘った跡(間歩)は、調査により900力以上見つかっています。その代表的なものが龍源寺間歩で、内部が見学できる間歩です。しかし、見学できる部分はほんのわずか、その奥にアリの巣のように掘られている坑道は見る事ができません。この中で行われた作業



龍源寺間歩



銀掘り間歩の中に入る場面

での銀の採掘から精錬までの作業は、すべて人力・手作業・小規模で、燃料確保のために植林がされるなど、現地の自然が大幅に改変されることはありませんでした。

の様子は、江戸時代に書かれた絵巻から知ることができます。ここでは、この絵巻をもとに、当時の銀の採掘の様子を見ていくことにしましょう。

【掘る】

「間歩」と呼ばれる坑道の中は、闇の世界です。明かりはサザエの殻などに油を入れ、そこに火をともした「蝶灯」を使いました。安政5年(1858)の記録では、39人が昼夜交代制で銀を掘り出していました。「銀掘り」と呼ばれるタガネで掘る者が24人、「手子」と呼ばれる掘る手伝いをする10才前後の子どもが10人、不要な石を運び出す者が5人いたと記述されています。



江戸時代の掘る道具

【水をくみ出す】

地下深く掘り進むと、湧き水が出てきます。これをくみ出すのも人力です。木製のポンプのようなものを使いました。



【空気を送る】

坑道の奥では換気が悪く、病気になる者が多く出ました。そこで唐箕を改良した送風装置を使い、坑内に空気を送りました。



【運び出す】

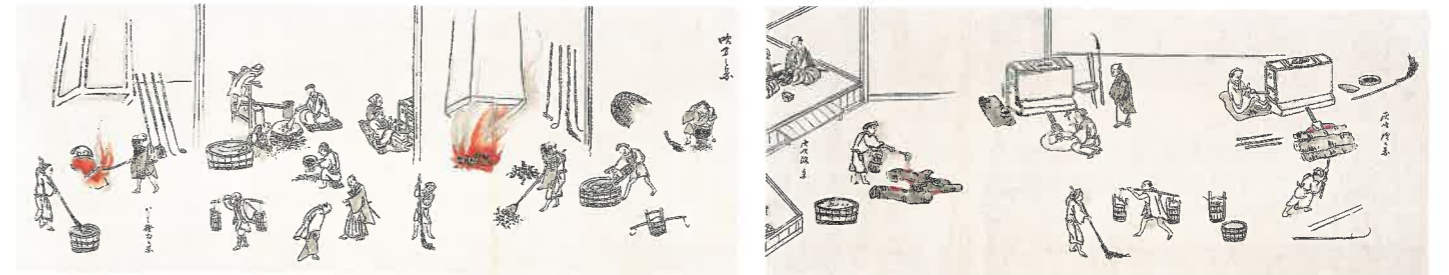
運び出す仕事は、「柄山負」と呼ばれていました。拾った石を集めて、狭い坑道を背負って外に出しました。



銀の精錬—灰吹法—

鉱石から銀を吹き分ける「灰吹法」は、天文2年(1533)に博多の商人神屋寿禎が朝鮮半島から招いた慶寿という技術者によって、国内では石見銀山に最初に導入されました。この技法によって銀の精錬技術は飛躍的に発展し、その後生野銀山

や佐渡金銀山などの全国の鉱山に普及しました。石見銀山が日本鉱山技術発祥の地と呼ばれるゆえんです。この灰吹法の導入によって、日本は飛躍的に良質の銀を増産し、東アジアにおける経済の変革と東西文化の交流を導きました。



銀の製錬工程

- 工程 1 鍊拵**
銀鉱石を「要石」の上に乗せてかなづちで砕く。その後、水の中でゆすりながらより分ける。
- 工程 2 素吹**
細かな銀鉱石に鉛とマンガンなどを加えて溶かし、浮き上がる鉄などの不純物を取り除き、貴鉛(銀と鉛の合金)を作る。
- 工程 3 灰吹・清吹**
貴鉛を「灰吹床」で加熱して溶かし、鉛を灰へ染み込ませて、灰の上に銀だけが残るよう分離させる。その後、同様の作業を行い、灰吹銀の純度を上げる。



灰吹法を解明する手がかり

灰吹法が石見銀山に導入された当初は鉄鍋を使っていたことが、発掘調査によって明らかとなっています。鉄鍋は、開発初期の遺跡である仙ノ山山頂付近(標高470m)から出土したもので、直径約20cmで片口の付いた煮炊き用のものでした。敷石と鉄製の火箸も同時に出土し、鍋の中に付着した灰からは科学分析により、鉄・マンガン・鉛・カルシウムなどが検出されました。

鉄鍋(大田市教育委員会所蔵)

鉄鍋保存処理状況

1 世界遺産とは

(1)世界遺産とは、1972年のユネスコ総会で採択された「世界遺産条約」*1に基づいて、世界遺産リストに記載(登録)された、世界的に「顕著な普遍的価値」をもつ記念物、遺跡、自然の地域など、国家や民族を超えて未来世代に引き継いで行くべき人類共通のかけがえのない地球の「自然」や人間によって創造された「文化」の遺産のことです。

(2)世界遺産に登録されるためには、世界的に顕著な普遍的価値を有し、世界遺産の登録基準の1つ以上を満たしている必要があります。さらに、世界遺産としての価値を将来にわたって継承していくための保護・管理措置が講じられている必要があります。

(3)世界遺産リストに登録されているのは、2019年7月現在で、1,121件(文化遺産869、自然遺産213、複合遺産*239)です。

*1.世界遺産条約
正式名称は「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」
*2.複合遺産
自然遺産、文化遺産の双方の登録基準を満たして登録されたもの

2 世界遺産の登録基準(文化遺産の場合)

- (1)人類の創造的才能を表す傑作であること
- (2)建築、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間または世界のある文化圏内の価値観の交流を示すもの
- (3)現存する、あるいはすでに消滅した文化的伝統や文明の存在に関する独特な証拠を伝えるもの
- (4)人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、建築技術または科学技術の総合体、あるいは景観の顕著な見本
- (5)ある文化(または複数の文化)を特徴づけるような伝統的集落や土地・海上利用の顕著な見本。又は、人類と環境とのふれあいを代表するような顕著な見本(特に、不可逆的な変化によりその存続が危うくなっている場合)
- (6)顕著で普遍的価値を持つ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連があるもの(この基準は、他の基準とあわせて用いられることが望ましい)

3 日本の世界遺産 (2019年7月現在)

名 称	所在地	分類	登録年
1 法隆寺地域の仏教建造物	奈良県	文化	1993年
2 姫路城	兵庫県	文化	1993年
3 白神山地	青森県・秋田県	自然	1993年
4 屋久島	鹿児島県	自然	1993年
5 古都京都の文化財	京都府・滋賀県	文化	1994年
6 白川郷・五箇山の合掌造り集落	岐阜県・富山県	文化	1995年
7 原爆ドーム	広島県	文化	1996年
8 厳島神社	広島県	文化	1996年
9 古都奈良の文化財	奈良県	文化	1998年
10 日光の社寺	栃木県	文化	1999年
11 琉球王国のグスク及び関連遺産群	沖縄県	文化	2000年
12 紀伊山地の霊場と参詣道	三重県・奈良県・和歌山県	文化	2004年
13 知 床	北海道	自然	2005年
14 石見銀山遺跡とその文化的景観	島根県	文化	2007年
15 平泉-仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群-	岩手県	文化	2011年
16 小笠原諸島	東京都	自然	2011年
17 富士山-信仰の対象と芸術の源泉	山梨県・静岡県	文化	2013年
18 富岡製糸場と絹産業遺産群	群馬県	文化	2014年
19 明治日本の産業革命遺産 製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業	福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・鹿児島県・山口県・岩手県・静岡県	文化	2015年
20 ル・コルビュジエの建築作品-近代建築運動への顕著な貢献-(国立西洋美術館本館)	東京都	文化	2016年
21 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群	福岡県	文化	2017年
22 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産	長崎県・熊本県	文化	2018年
23 百舌鳥・古市古墳群-古代日本の墳墓群-	大阪府	文化	2019年

このほか、日本は、世界遺産に登録することが適当だと思われる物件の目録=世界遺産暫定リストを世界遺産委員会*3に提出しています。暫定リストは、世界遺産条約を締結している国が、5~10年の間に世界遺産に推薦しようとする

物件をリストにしたもので、推薦された遺産の価値を幅広く比較研究するために用いられています。暫定リストに記載された物件でなければ世界遺産に登録されません。

*3.世界遺産委員会
世界遺産条約締結国から選出された21か国の委員国で構成される世界遺産に関して話し合うための国際連合教育科学文化機関(UNESCO)の委員会。会議には諮問機関である国際自然保護連合(IUCN)、国際記念物遺跡会議(ICOMOS)、文化財の保存及び修復の研究のための国際センター(ICROM)の代表者や非政府組織なども参加し、事務局は世界遺産センターが務める。通常毎年1回開かれ、主に次の4つの役割を持つ。

- ① 世界の優れた文化・自然を世界遺産リストに登録する。
- ② 各国と連携して、登録後の遺産の保全状態を監視する。
- ③ 緊急の保護が必要とされる世界遺産を、危機リストに記載する。
- ④ 世界遺産条約締結国の援助を行ない、世界遺産基金の有効活用を図る。



世界遺産委員会のような(2007年ニュージーランド・クライストチャーチ)

外国の代表的な世界遺産

文化遺産

万里の長城(中国)
タージマハル(インド)
イスタンブルの歴史地区(トルコ)
アンコール遺跡(カンボジア)
ヴェルサイユ宮殿と庭園(フランス)
ピラミッド(エジプト)
ポトシ市街(ボリビア)
etc...

自然遺産

グランドキャニオン国立公園(アメリカ)
グレートバリアリーフ(オーストラリア)
ガラパゴス諸島(エクアドル)
etc...

複合遺産

マチュピチュ(ペルー)
etc...

4 世界遺産の遺産範囲(日本の場合)



世界遺産の遺産範囲は、「資産」と「緩衝地帯」によって構成されます。

世界遺産として直接登録される場所で、厳格に保全・保護が義務づけられている区域。

法律で保護

世界遺産条約の作業指針により、推薦される資産を保護するため、その周辺に設けなければならない区域。

条例等で保護

5 鉱山(金・銀・銅)に関する世界遺産 (2019年7月現在)

	遺産名 / 概要	所在国	登録年
1	レーロース鉱山都市とその周辺	ノルウェー	1980年
2	ポトシ市街	ボリビア	1987年
3	古都グアナファトと近隣鉱山	メキシコ	1988年
4	ランメルスベルク鉱山と古都ゴスラーとオーバーハルツ水利管理システム	ドイツ	1992年
5	サカテカスの歴史地区	メキシコ	1993年
6	パンスカ・シュティアヴニツァ	スロバキア	1993年
7	クトナー・ホラの歴史地区	チェコ	1995年
8	ラス・メドゥラス	スペイン	1997年
9	ファールンの大銅山地域	スウェーデン	2001年
10	ゴイアスの歴史地区	ブラジル	2001年
11	コーンウォールとウエストデヴォンの鉱山景観	イギリス	2006年
12	シーウェル鉱山都市	チリ	2006年
13	ロロペニの遺跡	ブルキナファソ	2009年
14	ティエラアデントロの王の道	メキシコ	2010年
15	タルノフスキェ・グリュの鉛・銀・亜鉛鉱山とその地下水利システム	ポーランド	2017年
16	エルツゲビルゲ/クルシューノホリ鉱山地域	チェコ・ドイツ	2019年



ポトシ(ボリビア)



グアナファト(メキシコ)



ランメルスベルク(ドイツ)



サカテカス(メキシコ)



パンスカ・シュティアヴニツァ(スロバキア)



ファールン(スウェーデン)

石見銀山の歴史略年表

時代	西暦	年号	主な出来事
鎌倉	1308~1311年	延慶年間	初めて石見銀山が発見されたという(「銀山日記」)
室町	1527年	大永7年	博多の商人・神屋寿禎(かみやじゅてい)、石見銀山を発見する
	1533年	天文2年	石見銀山で灰吹法(はいふきほう)による銀精錬がはじまり、以後国内の他鉱山に広まる
	1556~1562年	弘治2~永禄5年	毛利氏と尼子氏が互いに銀山の争奪戦を展開し、やがて毛利氏が支配する
	1568年	永禄11年	ポルトガル/ドラードの日本図に「銀鉱山王国」の記載がある
江戸	1600年	慶長5年	関ヶ原の戦いの後、徳川氏が領有
	1601年	慶長6年	大久保長安、初代石見銀山奉行となる
	1602年	慶長7年	年産4千貫=15トンの銀を産出する
	1603年	慶長8年	山師安原備中、年3600貫=13.5トンの運上を納め、家康に謁見(「銀山日記」)
	1624年	寛永元年	銀山全体の銀産出量が減少し始める(年間2200貫=8.2トンを含めた)
	1673~1682年	延宝元~天和2年	銀産出量がさらに減少する(10年間の平均産出高261貫=980キロ)
	1675年	延宝3年	石見銀山領は代官統治へ
	1731年	享保16年	井戸平左衛門代官 着任
	1733年	享保18年	さつまいも植え付けを奨励した。井戸平左衛門 没
	1766年	明和3年	石窟五百羅漢が25年の歳月を経て完成し、羅漢寺が創建される
明治	1800年	寛政12年	大森大火により町の大半が焼失。翌年、熊谷家住宅が再建される
	1815年	文化12年	大森代官所門長屋再建
	1869年	明治2年	大森県が置かれる(8月から明治3年1月まで)
	1872年	明治5年	浜田地震により坑道崩落などの被害を受ける。五百羅漢の石窟も一部崩落する
大正	1886年	明治19年	大阪・藤田組が「藤田組大森鉱山所」を設立。翌年、経営開始
	1895年	明治28年	清水谷製錬所完成
昭和	1896年	明治29年	清水谷製錬所操業休止。以後、操業の中心は永久地区となり、銅生産が主力となる
	1917年	大正6年	第一次世界大戦に伴う需要増加のため増産。近代操業のピーク(銀4.2t、銅477t)
昭和	1923年	大正12年	第一次世界大戦後の銅相場低下により経営不振となり、休山となる
	1939年	昭和14年	前年制定された「重要鉱物増産法」により、株式会社藤田組が採鉱再開を目指す
	1942~1943年	昭和17~18年	銅採掘を試みるが大水害により設備流失、坑道水没などの被害を受け、経営再開を断念
	1956年	昭和31年	大森町が大田市に合併される
	1967年	昭和42年	「石見銀山遺跡」県指定史跡となる
平成	1969年	昭和44年	代官所跡、龍源寺間歩(りゅうげんじまぶ)など14カ所国指定史跡となる
	1987年	昭和62年	大森、銀山の町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区に選定
	1993年	平成5年	大田市による石銀(いしがね)地区発掘調査開始。採掘、精錬の跡や関連遺物が発見される
	1996年	平成8年	島根県・大田市共同の石銀地区調査が始まる
	2001年	平成13年	世界遺産暫定リストに登録(4月)
	2002年	平成14年	「銀山柵内(さくのうち)、山城跡、港湾」国史跡追加指定となる(3月)
	2004年	平成16年	大田市・温泉津町・仁摩町の景観保全条例が制定される(7月) 温泉津の町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区に選定(7月)
	2005年	平成17年	石見銀山遺跡関係鉱区禁止地域指定(1月) 「石見銀山街道(鞆ヶ浦道、温泉津沖泊道)、宮ノ前地区」国史跡追加指定となる(3月) 「銀山柵内、羅漢寺五百羅漢、鞆ヶ浦集落、沖泊集落」国史跡追加指定となる(7月)
	2006年	平成18年	大田市・温泉津町・仁摩町が合併し、新「大田市」となる(10月) 世界遺産登録推薦書をユネスコに正式に提出(1月) イコモス(国際記念物遺跡会議)による現地調査(10月)
	2007年	平成19年	イコモスの評価結果が示され、「登録延期」の勧告がなされる(5月) 第31回世界遺産委員会において世界遺産に登録される(7月2日)
2008年	平成20年	大森、銀山の町並み周辺の山林が重要伝統的建造物群保存地区に追加選定される(12月)	
2009年	平成21年	石見銀山街道(鞆ヶ浦道、温泉津沖泊道)の一部が、国史跡追加指定となる(3月)	
2010年	平成22年	温泉津の町並みに接する温泉津湾の一部が重要伝統的建造物群保存地区に追加選定される(12月) 第34回世界遺産委員会において軽微な変更(登録範囲の拡大)が承認される(8月)	



現地情報・ガイドのお問い合わせ

◆ 石見銀山世界遺産センター
 〒694-0305
 島根県大田市大森町イ1597-3
 TEL 0854-89-0183
 FAX 0854-89-0089
<http://ginzan.city.ohda.lg.jp/>



◆ 大田市観光協会
 〒699-2301
 島根県大田市仁摩町仁万562-3
 TEL 0854-88-9950
 FAX 0854-88-9960
<http://www.ginzan-wm.jp/>

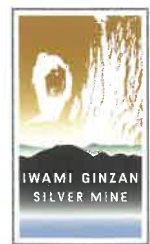


◆ 石見銀山ガイドの会
 〒694-0305
 島根県大田市大森町イ824-3
 TEL 0854-89-0120
 FAX 0854-89-0706
<http://iwamiginzan-guide.jp/>



編集・発行 (2020.3)

◆ 島根県教育庁文化財課世界遺産室
 〒690-8502 松江市殿町1番地
 TEL 0852-22-5642
 FAX 0852-22-5794
<http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaisan/>



石見銀山 WORLD HERITAGE

このマークは、世界遺産である石見銀山遺跡を構成する間歩や山、海などの資源をモチーフにし、公式マークとして石見銀山協働会議が作成しました。

表紙地図/ドラード/日本図(1568年)
 (松本賢一「南蛮船毛日本地図集成」鹿島出版会より転載)